
Kiss me Baby!!

七浦彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Kiss me Baby!!

【NZコード】

N5190A

【作者名】

七浦彩

【あらすじ】

バレ一部の桜井と芳川。二人は背の高さも部活での立場もぜんぜん違う。

牛乳はやつぱ風呂あがり、それも川上3・6牛乳に限る。

あの独特的なフォルム、ストローを刺した時の紙臭さ、青いパッケージの上にさりげなく配置された、牛乳になんの関係もなさそうなハトのイラスト。最高だ。全てが完璧だ。

俺は一日一リットルの飲乳を心がけている。給食の時残った牛乳は全て俺が飲む。俺は牛乳が好きだ。この世で最も尊い飲み物だと確信している。

カルシウムをふんだんに含んだ、背を伸ばすための唯一の薬。成長期まっさかりの俺には、欠かしてはならないものだ。牛乳をばかすか飲み始めて、もう半年になる。だというのに。

「はいっ桜井君一四三三センチね！ 声変わりまだかしら？」保健の先生のムダに明るい声が保健室じゅうに響き渡った。そりやないよ先生。体重は秘密にするのに身長は公開かよ。

しおしおと体重計の列に並ぶ俺の肩に、たくさんの手が乗った。

「可愛いなあ隆明は」

「ファイト

「頑張れよ」

「俺の牛乳やるよ」

級友たちの暖かな励ましに応える気力も、もう俺には残されていなかつた。俺は古びた体重計に乗つた。また少し減つてしまつた体重を申告された。

ヘコみっぱなしで保健室を出た俺を待ち構えていたのは、同じクラスの女子軍団だつた。

「たかあきい、元気出せよつー！」

「まだ伸びるつてえ、ヘーキヘーキ！」

聞かれていたのか。うわあもおやだなあ、今すぐこの世から消え

去りたいよ。どこまで聞こえていたんだらう?

そろそろと女子たちの列に目をやると、彼女が 芳川涼子が、小さく、ファイト、のポーズをキメていた。俺はますますヘコんで、前後不覚の状態に陥つた……。

彼女の痺れるようなアタックを初めて見てから、もう半年になる。芳川は一年ながらもジュニアバレーチームに入つていたことを買われて、即うちの女子バレー部のスタメン入りを果たしていた。俺は背が低いとはいえどバレーが好きで、けれど男子のジュニアバレーチームというのはなくて、中学に入つてやっとバレーができると喜んでいた、そんな矢先のことだった。

べしべし容赦なくボールが飛んでくる中、ビビりながら球拾いをやつていた俺は、ふいに聞こえた鋭いホイッスルの音に思わず顔を上げた。

その瞬間、ただでさえ高い背をさらさら精一杯反らして、まるで羽根を生やしたように軽々と跳んだ彼女の姿を見た。そしてそのしなやかな手にボールが吸い付き、また放たれたのを、俺はスローモーション映像で記憶している。

ボールはものすごい速さと強さで、体育館の床の上を一回跳ねて、ぼうつとしていた俺の顔に直撃した。

忘れないような、忘れないような、鮮烈な思い出だ。

俺はその日彼女に恋をした。アタックがきれいだった、というのも理由の一つだが、その後気絶してしまつた俺にずっと付き合つてくれていた、というのもだいぶポイントが高かつた。彼女は誰よりも練習をしなくてはならない立場だったのに、まぬけな理由で倒れた俺が目を覚ますまで、ずっと保健室にいてくれた。目を覚ました時最初に見た彼女の心配そうな表情と、大丈夫、と問いかけてくる優しい声に、俺はぎゅんとやられてしまった。

それから俺は一日一リットルの飲乳を自分に課している。彼女の身長は聞いたところによると（まだ俺と同じ十三歳なのに…）、一

六八センチあるやうだ。一十五センチの差は大きい。そう、例えば、例えば、だ。こゝ、その、きす、などを、する時にだな、彼女がかがんで俺が背伸びする、という強烈に恥ずかしい構図になってしまったわけだ。

けれど現実は厳しく、半年の間に成長のきざしが見えたことはなく、俺はずつとこのままだった。もしかして一生このまんなだらうか。想像するだに恐ろしい。

バレーの方でも俺の力は伸びない。胸に描く理想と現実は違う、ということを突きつけられている真っ最中だ。

芳川涼子に追いつきたい。背も、バレーの技術でも。小さな俺の目標は、打ち砕かれっぱなしでいる。

本日も牛乳が五パックほど残っていた。俺はそれを全部飲み干した。半ばやけっぱちになりながら、だけれど。

紙パックを押しつぶす勢いで牛乳を飲む俺を、みんなが笑っていた。芳川も笑っていた。涙が出そうだったけれど、男の根性でどうにかこらえた。

虚しい一日を終え、部活の時間がやつてきた。走りこみはキツイし、球拾いはいまだに怖い。やつと打たせてもらえるようになつたサーブもへなへなしている。背が低いせいでブロックもアタックもさせてもらえない。

それでも俺は毎日さぼらず部活に出ている。もちろん芳川を見るためだ。クラスにいる時の芳川と部活にいる時の芳川はだいぶ違う。きりつとしていて、どこか遠いところにいる。

手を伸ばして、走れば届く場所にいるのに、遠い。
遠すぎて、泣けてくる。

思い切りボールに打ち据えた右腕が熱を持ち始めるまで、俺はただただサーブを打ち続けた。

大会が近いということで、体育館の外が真っ暗になるまで部活は

続いた。冬が近付いて、日が落ちるのが早くなつているせいもあるのかもしない。ともあれバレー部の男子部員は安全のため女子部員と一緒に帰ることとなつた。

またな、じやあね、また明日、とこうやうとうを繰り返し、俺は薄暗い灯りのえしい道を無言で歩いた。夜の空気がさらさらして、少し冷たい。これから、寒くなるな。そう思つて、俺は両手をこすり合わせた。右手が少し痛かつた。

「桜井、サーブの時力みすぎだよ？」

「ぎょわ

俺は思わずカエルのような声を出してしまつた。まだ誰か残つていたとは思わなかつたのだ。

振り返つたら、かぼそい電灯の明かりに照らされた、芳川の顔が見えた。なんでよりによつて芳川なんだ。そもそもなんで帰り道が同じなんだ。知らなかつたぞ？

「よよよ芳川もこつちなか

「よよよ芳川はこつちだよ。いつも桜井の後ろ歩いて帰つてたのに、気付かなかつた？」

「き、気付きませんで」

ふーはーと深呼吸する。落ち着かなば。落ち着かねば。

「えと、サーブ力みすぎつて、……どゆこと？」

ようやく普段どおりのいつもクラスや部活で接しているように、なんの氣も無いような態度に戻して、俺は芳川を見上げた。至近距離で見ると首が痛い。俺は半歩ほど後ろに下がつた。

「んーとね、なんか無駄な力が入りすぎなんだよね。特に右手降る時。こう、ね、すつと上に上げてあげるみたいにすれば上手く飛ぶ

よ

芳川はしなやかな動きでそれを実演してみせた。けれど俺にはどうがどう違うのかがわからない。首を傾げつゝ芳川のやつている通りにやつてみた。一振りするごとに芳川が首を横に振つた。

「違う違う。こう

と、芳川は何を思ったか俺の手をとつて、ちょうど書道の先生が書き方を教える時みたくサーブの力の入れ方を俺の腕に伝えてきた。温かい手、柔らかく背中に当たる、芳川の何か。一瞬何が起きたか、わからなかつた。事を理解した次の瞬間、変な電気みたいなのが手から背中から全身へと巡つた。俺は夜で辺りが薄暗かつたのを心から感謝した。俺の顔は茶が沸かせそうなほど熱くなつていた。

「こ、こ、う

「そう、こ、う

ぱつくんぱつくん鳴る心臓を抑え、俺は教わつた通り腕を降つた。芳川が満足そうな顔をしていた。新しく見た芳川の表情。けれど俺の頭の中はパニックでそれどころではなかつた。

俺はそれ以上の会話を慎み、早々に芳川を送り届けて家に帰つた。夕食の味は何もわからなかつた。風呂に入つても、芳川の柔らかい香りが俺につきまとつていた。

視力や聴力、腹の中など体中の検査が全て終わると、俺たちは女子と男子に分けられて、女子は視聴覚室へ、男子はレッスン教室へと集められた。

見させられたビデオは、やつぱりといつかなんというか、性教育ビデオだつた。女の子を大事にしましょ、の一言で片付けられそうな前半と、異性に興味を抱くことは悪いことではないのだよ、バンバン恋しなさい、と叫んでいるような後半で構成されていた。昨日の今日だからどうリアクションしていいかわからなかつた。つまらなそうにあぐびする奴、にやにや笑つてる奴、真剣に見てる奴。俺は「こいつ超興味シンシンなんじゃねえの」と思われるのが嫌だったのでだるそうに机に突つ伏しながらそれを見た。おそらくクラスの奴らほとんどが俺と同じ気持ちだつたと思う。みんなそれっぽいポーズをしていたから。

ぐだぐだな一時間を終え教室に戻ると、先に帰つてていたらしい女子がひそひそと話をしていた。俺たちが戻つてきたのに気付く

と、慌ててやめたが。

「お前ら何見たんだよ」

気の利かないことで有名な山本がはつきりすっぱりと女子グループに聞いていた。女子はみんなほんのり顔を赤くして、黙っていた。

そんな中芳川は一人涼しい顔で、こう切りかえしてきた。

「正しい恋をしましょ、ってビデオ」

俺がさらに芳川への想いをつのらせた、といつことば、言つまでもない。

授業を終え、かつたるい「こころの相談」の時間も終え、俺はいそいそと部活に向かつた。うちの中学ではお節介にも担任がクラス全員一人ずつを呼び出して、何か不満事はないか、悩みはないか、ということを聞いている時間がある。一学期にだいたい二回。教師によつて違う。

友人関係、クラブのこと、その他もろもろ。悩みなんてないつて何度も言つているのに、今年初めて担任するクラスを持ったという先生はしつこくいろいろ聞いてきた。仕方ないので身長を伸ばす方法を聞いたら、好き嫌いせず野菜も食べなおかつカルシウムを摂ること、とありきたりな答えが返つてきて少しがつかりした。

まあそんなことはどうでもいい。早く芳川に教わったサーブの威力を試したい。俺は教務室の近くの窓から内履きのまで中庭に出た。体育館と教務室は中庭を挟んで真向かいにある。本来なら渡り廊下を渡つてずっと遠回りしなくてはならないのだが、それをするのもおつくうなほど、俺の心は跳ねていた。

見つからぬようもともと低い背をなお縮めて歩くと、マニートマトが植えある花壇の方から人の声がした。やべえ、ととっさに植え込みに隠れると、その声がよく知つたものであることに気付いた。

女子バレー部の、元スタメンアタッカーの先輩の声だった。

いい気になつてんなよなんだよその日ムカつくんだよお前が来たせいでチームバラバラになつてんのまだ気付かねえのかよふざけん

なよ何が元ジユニアチームだよ関係ねんだよ。

「圧倒的な悪意。それをまともに受け止めている相手は、簡単に予測できた。

新しくアタッカーになった、人間。

俺は意を決して、わざと植え込みをがさがさ言わせながら花壇の方へと走った。今まで聞いた中で一番汚い声が止み、足音がそそくさと体育館へ向かった。

ぼうっと呆けた顔をしている芳川と目が合った。芳川は俺の顔を見ると、小さく、憐れに苦笑した。

「……見られちゃったかあ」

芳川のそんな表情は見たくなくて、俺は制服のままの芳川の、胸元の青いリボンに視線を落とした。

「芳川、いつもあんなこと言われてるのか」
やりきれなかつた。きれいだと思っていた。みんながそう思つていると、バカな俺はそう思い込んでいた。

部活の時の芳川が、遠くに感じる理由。それは芳川があんまりすゞぎるからじやなくて。

芳川が、周りのみんなを拒んでいたからだつたんだ。

「いつもじゃないよ。今日はたまたま……」「嘘つくなよ！」

俺は情けなくもまだ青色のリボンを見たまま叫んだ。涙がぱたぱた、勝手に落ちてきた。あんなに芳川を見てきたのに、俺は何一つ気づいてやれなかつた。

「うそつくなよ……」

喉が詰まつた。息ができなくなつた。俺はリボンすらも見ることができなくなつて、うつむいた。

「ねえ、桜井」

頭の方から落ち着いた声が聞こえてきた。

「一四三センチの世界つて、どんな感じ?」

こきなりの質問に顔を上げると、芳川はいつもの芳川に戻つてい

た。

「あたし一次成長期早く来ちゃったからで、もう伸び伸びの止まつたんだ。すぐだつたよ、ここまで来るの。だから憶えてないんだ。

一四三センチの世界

芳川は目を細めて俺を見た。昨日サーブを教えてくれた腕が、俺を抱き締める。

「憶えてないから、わからないんだ。そういう人の気持ち。バレーを中学に入つてから初めてやつた人の気持ちとか、いろんな人の気持ち」

近くで見た芳川の肩は、俺の腕にもすっぽり収まりそくなぐらいで。

「だからあたし冷たいって言われるのかな」

芳川の声が、震えている。たまらなくなつて、俺は芳川の背中に腕を回した。

「冷たくないじゃん。俺にサーブ教えてくれたじゃん」

こんな言葉がどこまで芳川の救いになるのかわからなかつたけれど、俺は言わずにいられなかつた。

「他の奴の気持ちなんか知らないでいいよ。芳川はすごいよ。芳川がいなくちゃ俺だめだよ。芳川が……芳川が、芳川だから、俺は好きになつたんだし、芳川がいるから、バレー、きつついけど辞めたくないし！」

思いつく限りの言葉をつないで、俺は芳川をきつく抱き締めた。はたから見たら俺が芳川にしがみついているように見えるだらう。この際そんなことどうでもよかつた。

「だから、芳川。あんなのに負けるなよ。芳川が選ばれたのは芳川が頑張ったからだろ？ あいつらよりずっと前から頑張つてたからだろ？ それすぐえじゃん！ だから……」

右の頬に、ふわ、と柔らかいものが触れた。我に帰つてみると、芳川のにおいが強く感じられた。大変なことを口走つてしまつた氣もする。そして、そして何より、今頬に触れているものは何だ？

俺はそろそろと目を右にやつた。

芳川が、俺の頬にキスをしていた。

「ありがと、桜井。あたしも桜井のこと好き」
気が動転した俺は硬直するしかなかった。

「桜井がいるなら、もう少し頑張つてみるよ、バレー」

そう呟いて、芳川は俺の耳に唇を近づけた。

「桜井が、ちっちゃくとも頑張ってる姿がね、あたしの励みだったんだ」

ちっちゃくとも、がひつかかったけれど、芳川が俺を見ていてくれたこと、俺を必要としてくれていたことが、嬉しくて仕方がなかった。

「な、なら……頑張る」

必死でそれだけ言つた俺に、芳川は最高の笑みを返した。

「うん、頑張る！」

俺たちは急いで体育館に向かつた。揃つて遅れた俺たちに一瞬非難の視線が向けられたが、俺も芳川も気にしなかつた。

俺の打つたサーブは高く飛んで、びし、と床を叩いた。芳川が笑つていた。あの遠さが、なくなつていた。

朝、登校したと同時に、山本に丸めた教科書を向けられた。

「ちびっこ桜井君、身長一十五センチ差の彼女を持った感想をお聞かせください！」

どうやら教科書はマイクの代わりらしい。俺はうろたえて、どうでそれを、と墓穴を掘つてしまつた。

「中庭あんだけ熱烈にやつてたらみんな気付くって」

芳川を見ると俺と同じように質問責めに遭つていた。だが芳川は眉一つ動かさず、冷静に、うーんチワワみたいで可愛かつたから力ナ？などとほざいていた。芳川は俺の恨めしそうな視線に気付くと、おはよう、と爽やかな笑顔を見せた。

「桜井ー、これあげる！」

しゅ、と投げられたのは朝イチ絞りたての川上³・6牛乳。青い
パッケージにハトのマークが目印だ。

「早くおつきくなつて、今度は唇にキスしてねえ」
ざけんじやねえやい。俺は芳川の新しい一面に涙した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5190a/>

Kiss me Baby!!

2010年10月8日15時59分発行